

営農だより 第2号

目標

- ①「米ぬか入り肥料」の施用により、循環型農業の実践
- ②粒張が良く、食味値80点以上の良食味米

◎使用資材の消毒を行いましょ！

前年使用した、浸種用の桶や育苗箱等には雑菌が残っている可能性があります。資材は洗浄し、必ず「ケミクロンG」で消毒してください！

育苗箱 10 分間浸漬の場合	→	ケミクロンG 1,000 倍 (水 100ℓに対し、ケミクロン G100g)
ジョウロで散布 又は瞬間浸漬 の場合	→	ケミクロンG 500 倍 (水 100ℓに対し、ケミクロン G200g)

【 種子消毒 】

薬液浸漬 : 種子 10 kg の場合、水 20ℓ に対し・・・ (粃 1 : 水 2)

モミガードC水和剤 100 g (200 倍) > 混ぜて、24 時間停滞水で浸漬し、
スミチオン乳剤 20ml (1,000 倍) 5～24 時間風乾する

種子は袋いっぱいに入れずに 7 分目程度にしましょう。

効果ムラが出ないように、消毒中にネット袋を 2～3 回攪拌します。

浸漬後は十分陰干しし薬剤を固着させ、消毒後は水洗いせずに浸種作業に入ります。

【 浸 種 】

- (1) 粃と水の容量比は 1 : 2 以上。たっぷりの水を使用しましょう。
- (2) 浸種時は薬液が袋の内部に浸透するように、薬液中で種子袋をよく揉んでください。
※粃袋を薬液に浸す・出す・揉むことを繰り返して行き、粃内部の空気を追い出して液成分をよく染込ませます。
- (3) 浸種初めの 3～4 日間の管理・・・薬液の効果を高めるために、次の点を守ってください。

- ①水温 10℃ 以上を保つ ②水を入れ換ええない (循環しない静止水)

※発芽を良くするため、浸漬後最初の 24 時間は水温 10～15℃ を必ず保つようお願いします。

(絶対に水温 10℃ 以下にしないように)

- (4) 4～5 日目以降の管理・・・発芽を揃えるため、次の点を守りましょう。

- ①浸種期間中は、1～2 日に 1 回水の入換えを行う。

※水の入換えで酸素を供給します。

酸素不足になると鞘葉は伸びるが根は伸びにくくなります。

- ②粃殻の外から胚の部分が透き通って見えるまで十分浸漬する。

おいしいをつくりましょ。

富士伊豆農業協同組合

発行 令和 5 年 3 月 20 日
北駿産米改良推進協議会
JA 富士伊豆御殿場営農経済センター
TEL:0550-84-4820

浸種直後の水温管理

浸種直後～24 時間の低水温 (10℃ 以下) で発芽率が低下します。

○浸種直後～24 時間の水温が適温 (13℃ くらい)

→その後水温が 10℃ 以下になっても発芽率はあまり低下しない。

○浸種直後～24 時間の水温が 10℃ 以下

→発芽率が低下し、その後水温を上げて発芽率は戻らない。

(浸種時間を長くしても、ほとんど意味がありません)

以上のことから 浸種直後～24 時間を 10～15℃ の水温に保つ

※水温が上がりすぎてしまうと粃が十分に給水しないうちに芽が動いてしまい、発芽が揃いになる原因となります。気温が高い日は水桶を日陰に入れるなどして、水温が上がらないように気を付けましょう。

【 芽出し(催芽) 】

育苗箱での苗立ちを揃えるためには、播種時にある程度発芽させておく必要があります。

これを「芽出し(催芽)」と言います。

◇ハトムネ催芽器で催芽する場合 水 20ℓ に対し・・・

カスミン液剤 (細菌病予防) → 20ml } 消毒液をハトムネ催芽器に入れ、
クリカー消泡剤 → 1.5ml } 水温 25℃ × 1.5 日間循環させ芽出し
(芽の出方で調整する)

◇風呂、その他で芽出しをする場合

30℃ で芽出しをする。ハトムネ状態に仕上げる。

もみ枯れ細菌病対策の為、催芽機の水温は 28～30℃ とする。

(32℃ 以上の高温にならないように注意する)

注 意

催芽の程度 (芽の伸び) や根の伸びが大きいと播種作業時に芽や根が折れてしまいます。

温度を確認しながら芽や根の伸びを確認しましょう。

芽の長さは 1 mm 程度。

★正しい催芽はハトムネ状態

【播種（種まき）】

薄播きは健苗育成の第一条件です!!

播種量が多くては、健苗に育ちません!!

- ・ 稚苗なら催芽粃で 150 g / 箱で播種
- ・ 中苗なら催芽粃で 110 g / 箱で播種

	播種期	播種量(箱あたり)		必要箱数
		乾粃	催芽粃	
稚苗	田植え前 20~25日	115 g	150 g	16~18箱/10a (3~4本植え)
中苗	田植え前 30~35日	85 g	110 g	21~22箱/10a (3~5本植え)

稚苗：育苗期間が短く、使用苗箱数が少ない。

中苗：品質向上技術として有効。ただし、3.5葉までの管理(35日前後)が必要。

→太茎となり穂になる率が高い。穂ぞろいが良くなる。初期の段階で藻類に負けない。

→登熟が良い

◇培土使用量～使用量を間違えると、苗の生育に影響するので注意

「合成培土3号」 床土 1.8 kg 覆土 1.1 kg 7.0 枚/袋

「宇部培土」 床土 2.5 kg 覆土 1 kg 5.7 枚/袋

覆土前に十分に灌水する。(灌水量は、使用する培土によって異なる)

目安～床土を握って指の間から水がにじみ出る程度 (一般的には、10程度/箱)

※灌水量が少なすぎると発芽が悪くなり、

灌水量が不足していると粃の持ち上がりの原因となります。

細菌病予防も同時に行いましょう!

播種時に下記3薬から1つを選択し使用する (購入培土の場合も必ず使用)

ダコレート水和剤 → 100g/60ℓ 600倍 → 120箱分 1箱 500ml 灌水
(リゾープス菌・トリコデルマ菌・フザリウム菌)

ダコニール 1000 → 100ml/80ℓ 800倍 → 160箱分 1箱 500ml 灌水
(リゾープス菌)

タチガレエースM液剤 → 100ml/50ℓ 500倍 → 100箱分 1箱 500ml 灌水
(ピシウム菌・フザリウム菌)

床土→灌水→播種→覆土→完成 (育苗器等へ)

覆土後の灌水は、酸素欠乏を引き起こし、発芽障害の原因となるので絶対にしない!!



播種



150 g 播き



覆土



完成!

完成!
この後は灌水
しません!

【出芽】

覆土が終わった苗箱を育苗器等で温め、出芽を促します。

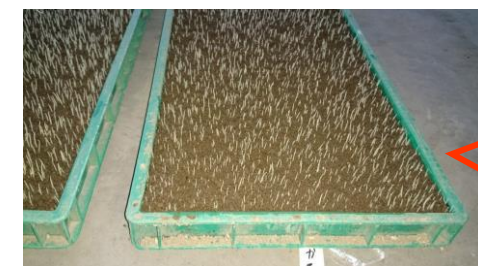
①温度設定 28~30℃を目途に出芽させる。(30℃以上では、細菌病発生の危険性が高まる。)

②“うど芽”が1cm (粃から1cm) になったらハウスに上げ、2~3日「ラブシート」を掛け緑化させる。(28℃以下では出芽に時間がかかり、カビの発生を助長させる)

軟弱徒長苗にならないよう、育苗器内でうど芽を伸ばしすぎないようにしましょう。

この時点で、うど芽を伸ばしすぎると、せっかく薄播きしても、良い苗はできません!!

※途中で何度も育苗器を開けると苗箱が乾燥し、粃の持ち上がりの原因となりますので気を付けましょう。



このくらいになっていたら育苗器から出して大丈夫です!

育苗器を使わずハウスで出芽させる場合は、平らな場所に6~10段に積み重ね、シートなどで被覆し保温してください。(日中の高温に注意)

※一番上の箱におもし(土のみを入れた苗箱等)をしておくと、粃の持ち上がり予防になります。

粃上がりの発生について

粃が露出すると鞘葉部が乾燥するため、生育遅れや生育のバラツキの原因となります。

[粃上がりの発生原因]

- ・ 播種後の灌水不足、培土水分が少ない
(土に対する根の貫入抵抗値が増加し、かつ温度が高くなり、根の伸長が促進される)
- ・ 覆土が少ない
- ・ 根の伸長速度が速い
(伸長速度が速いと床土にスムーズに入り込まず、粃自体が持ち上がる)

[対処方法]

- ・ 播種時にしっかり灌水する
- ・ 根の急激な伸長を防止するため、浸漬、催芽、出芽時の温度に気を付ける
- ・ 覆土の量を増やす
(しかし覆土を増やし過ぎると水分が減少し、根上りを助長してしまうこともあるので気を付ける)

【粃上がりが出てしまった場合】

露出した粃にふるいで土をかける

丁寧にじょうろで水をかけ、芽についた土を落とす